

千代島龍一

自らの**気づき**をもとに
信頼関係を築いてきた
頼れるまちの**クルマ**やさん



「有限会社千代島自動車整備工場」

匠人 たくみびと に聞く 3 のこと

1 会社自慢 してください。

国家資格保有スタッフが7名います。この規模でこれだけの資格者がいるところは、なかなかないと思います。「環境にやさしい自動車整備工場」として、何回も表彰を受けているのも自慢です。

2 仕事の 大きな転機は？

1991年、周りに先駆けてパソコンのシステムを導入したことです。莫大な経費がかかるし、両親には猛反対されました。でも、あれでガラッと会社全体の仕事効率が良くなった。仕組みを移行するまでは、僕も飲みに行く時間がなくなるほど、毎晩遅くまで仕事しましたよ。

3 休日の 過ごし方は？

基本はゴルフ、たまに釣り、そして掃除とか。その中で、大事にしているのが、月に一度の妻との出かけ。妻とは青年団時代からの付き合いです。感謝しなきゃって、思ってね。贅沢かもしれないけど、新幹線で博多まで行き、買い物したりして、ランチを楽しみます。



1955年創業。福岡県南部地域で最初に国土交通省の認定を受けた民間指定工場でもある。自動車整備をはじめ、新車・中古車販売、自動車保険、車検、買取、钣金塗装、レンタカー事業など幅広く手掛け、長年、地域の方々のクルマ全般のことを請け負っている。

☎ 0942-62-3128

住所／久留米市城島町城島566-2 営業時間／8:00～19:00
定休日／第1日曜、火曜、GW、夏季休暇、年末年始

＜提供サービス＞

・新車販売 ・中古車販売 ・自動車保険 ・車検 ・一般整備
・钣金塗装 ・車の買取 ・車内清掃 ・ニコニコレンタカー



「やっぱり人。常に人。
人づくりが大事なんです」

「優しいそうなお父さん」。それが千代島さんの第一印象だった。穏やかな表情と柔らかな物腰が、一瞬で安心感をもたらす。さすがは長年地域の人々に愛されてきた整備工場の社長である。社員は、事務所と整備工場に14名。奥さんや娘さんも一緒に働いていて、アットホームな雰囲気だ。社員の誕生日には、常務である奥さんが必ずケーキを買ってきて、みんなでお祝いするのだそう。さらに、千代島さんが個人的に、社員のお子さんと奥さんの誕生日にまで、プレゼントを用意するというから驚いた。スマートフォンのカレンダーには、社員とその家族の誕生日が記されている。まさにみんなのお父さんだ。「社員さんに対する感謝の行動」と言うが、なかなかできることではない。忘年会にも、従業員の家族を全員招いて、楽しんでもらっているという。

ふと事務所の壁を見ると「人こそ宝」と書かれた額が飾ってある。「やっぱり人。常に人。人づくりが大事なんです」。優しい声に力がこもった。その響きに、ゴツゴツとした岩が年数をかけて丸くなったような、そんな角のとれたような円熟味と、底知れぬ懐の深さを感じた。

「すね」。人に紹介するのは責任が伴うことだと、身をもって実感しているからこそ、お客様を紹介していただいた時や、「ありがとう」、「お前の」とこの社員、よかぜー」といった言葉をいただいた時が、一番ありがたく、幸せを感じる瞬間だという。

「お菓子のような仕事をしゃん。
これは千代島自動車の鉄則」

毎朝、千代島さんは朝礼でいろんな話をする。たとえば、「見えんところば、キレイに。お菓子のような仕事をしゃん」といった話だ。「お菓子のような仕事」とは、今は亡き初代社長、千代島さんのお父様の言葉だそう。「親父の時代はお菓子というのほ貴重で、キレイなものだったんですね。見えんところをお菓子みたいにキレイに、と教え込まれました。これはいまだに千代島自動車の鉄則ですよ。配線にひとつずつギボシ端子をつけて、束ねてクリップする。見えない場所だから、気付くお客様はほとんどいないと思う。でも、一事が万事、つながっているんです。そういう心構えで仕事をしてると、どんないろんなことに気づく。『汚れてるけん、拭いておこうとか、こちょっと、すり傷のついとるけん、色塗っておこうとか』。目で見ると、耳で聞いとるんじゃない、心で見るとるんだよ」と。確かに、整備工場を見ても、用具置き場、廃



「来てくださるのは地元のお客様。 足元を見つめて、丁寧な仕事を」

タイヤの保管場所まで、清掃が行き届いている。至るところに、千代島イズムが浸透していると感じた。

前日にどんなにお酒を飲んでいても、必ず5時に起きるという千代島さん。新聞を読んだ後は、草むしりをしたり、残務処理をしたりするそうだが、朝礼のネタを考えるのも早朝が多いとか。「あんまり堅い話ばかりじゃ、聞いている方もきついですからね」と、ソフトなネタをはさんだり、お客様の声を伝えたりしながら、時にはこんな厳しい言葉も投げかける。「力を出し惜しみすんな、全力でせんと新しい力が入って

弱者ゆえのやり方にこだわる

「若い頃は、ライオンがわが子を千尋の谷に落として、這い上がってきたのをまた落として…そんなイメージで社員に接してました。這い上がってこい。ついてこいと。仕事も大事なところは、全部自分でやってた」。しかし、社長に就任した翌年、専門家から「この会社は社長が1ヵ月病気になったらつぶれますよ」と指摘を受け、これではいけないと気づいた。それを機に、整備も経理も担当社員に全部任せようと決意したという。

気づいたんです。ここに来てくださっているのは、地元のお客様。もっと足元をみつめるべきだなあと」。そして、千代島さんの学びは深まった。自分たちを「弱者」と呼び、「強者」であるディーラーや全国展開の大手企業と同じやり方ではダメなんだと、弱者ゆえのやり方にこだわりの始めたのだ。地元のお客様にたくさん来ていただくためには、紹介が一番だという。まずは、来ていただいたお客様に心から信頼していただくこと、それが次のお客様への紹介につながり、広がっていく。「そのためには我々は何をしゃんとかな、という話を社員といつもしています。笑顔、迅速な行動、当たり前のことをやって、あともう一歩、かゆいところに手が届くように」。それお客様が喜んでくださるんですよ。『こはよかよー』と、アンケートに書いてあったりすると、本当に嬉しいで



Profile 千代島 龍一さん

昭和35年生まれ。大学卒業後、福岡日産に入社し、整備の経験を積んだ後、父親が創業した千代島自動車整備工場へ入社。42歳で社長に就任。地域活動にも深く関わり、「城島ふるさと夢まつり」の実行委員長は、60歳まで20年間務めた。



わたしの
情熱の
源泉

【可愛いお孫さん達】

朱里ちゃん、充騎くん、蒼汰くんの話をする時は、デレデレ。「じいちゃん、怪獣の役して♥」と言われ、お孫さん達からやつつけられているそう。